

# 令和7年度文化芸術の力を活用した地域のにぎわい創出事業実績報告

事業実施団体：EKG合同会社

## 事業の概要


事業名	高山夏希展
委託費の契約額	200万円
総入場者数	516人
事業全体の概要	<p>本事業は、岡山県津山市に位置するPORT ART&amp;DESIGN TSUYAMAを会場に、現代美術作家・高山夏希氏による個展「モノたちの記憶、あかくなる結節点」を開催し、地域に眠る文化的資源や記憶を掘り起こし、文化芸術を通じた地域の魅力向上およびにぎわいの創出を図ることを目的として実施した。</p> <p>会場であるPORT ART&amp;DESIGN TSUYAMAは、大正9年（1920年）竣工の旧銀行建築を活用した文化施設であり、歴史的建造物としての価値と、現在進行形で市民に開かれた文化拠点という両義性を有している。本展では、こうした建築空間の特性を活かし、建物そのものを「環境」として捉えたインスタレーション展示を構成した。</p> <p>作家は、主に津山城東地区および出雲街道沿いの地域住民から、不要になったが捨てられずに残されてきた家財道具や古物を収集し、それぞれのモノにまつわる記憶や思い入れをヒアリングした上で作品制作を行った。個人の生活史や地域の時間が刻まれたモノを素材とすることで、鑑賞者が自身の記憶や地域との関係性を</p>

	<p>重ね合わせながら体験できる展示空間が目指された。桶や掛け時計や着物など使い古された日用品が想像力をかきたてるアート作品に生まれ変わった。</p> <p>また、次世代を担う高校生とのワークショップを開催し、作家の技法のみならずアーティストとして生きる生き様を見せる(語る)ことを通じて、生徒に生き生きとした作家の姿勢や情熱を直接伝え刺激を与えることに繋がった。作家と共に制作を行い、仲間と話し合い、作品の概念を練り上げる創作過程を経ることで表現の幅を広げることができたと感じている。</p> <p>※生徒のワークショップの感想を後に記載している</p> <p>アーティストトークでは、作家と共に「古物」にも造詣が深い森本信一氏(つやま自然のふしぎ館 / 森本慶三記念館・館長)と美術館において日常的に現代アートに関わる遠山健一朗氏(奈義町現代美術館・学芸員)を迎え、本展の概要、古物を活用した創作や展覧会の意義、高校生とのワークショップについて鼎談を行い、議論を深めた。</p> <p>アーティストトークの後にクロージングコンサートを開催した。schole.inc 代表であり演奏家でもある菊地慎氏とシンガーソングライターでありピアニストでもある当真伊都子氏のデュオ「synfilms」の演奏会を開催、鑑賞者を魅了した。高山夏希氏も曲に合わせライブペインティングのパフォーマンスを行った。その詩情豊かな感性に参加者の目は釘付けとなった。そのクロージングコンサートにより展覧会は華やかさと厳かさが同居した印象的な閉幕となった。</p>
--	--

## 事業内容 (1)

事業名(個別にあれば記入)	高山夏希展「モノたちの記憶、あかくなる結節点」
参加アーティスト	高山夏希
事業の内容 ※別紙でも可	<p>展覧会概要</p> <p>PORT ART&amp;DESIGN TSUYAMAにて、現代美術家 高山夏希氏の個展「モノたちの記憶、あかくなる結節点」を開催した。本展は、大正9年(1920)に旧妹尾銀行林田支店として建てられ、現在は芸術文化交流拠点として市民に開かれている当館の建築空間を舞台に、継承と変化が共存する場所性そのものを取り込んだインスタレーション作品を展示発表した。</p> <p>高山氏は、PORTが立地する主に津山城東地区および施設が面する出雲街道沿いの人々から、不要になったが捨てられずに残さ</p>



	
開催期間	2025年11月29日(土) - 12月21日(日)
開催場所	PORT ART&DESIGN TSUYAMA
入場者等	395人


## 事業内容(2)

事業名(個別にあれば記入)	津山高校美術部とのワークショップ
参加アーティスト	高山夏希
事業の内容 ※別紙でも可	<p>本事業では、次世代を担う若者に対し、文化芸術に主体的に関わる機会を提供することを目的として、津山高校美術部と連携し、全4日間にわたるワークショップを実施した。</p> <p>初回となる10月7日は、東京に拠点を置く作家と津山高校をオンラインで結び、作家本人による自己紹介やこれまでの制作活動、作品および作品テーマについての紹介を行った。併せて、本展およびワークショップのテーマである「モノの記憶」に関する考え方を共有し、作家が実際に高校に来る10月20日までの宿題として、生徒各自が自宅等にある古物を調査・選定し、そのモノにまつわるエピソードや想いを整理する課題を提示した。</p> <p>10月20日から22日までの3日間は、作家が津山高校を訪問し、美術部の部活動の時間(16時~18時)を活用して対面形式でのワークショップを実施した。生徒たちは、自身や家族が所有する古物を持ち寄り、グループワークを通じて、モノに刻まれた記憶やエピソード、そのモノを通して得た心境や考えについて意見交換を行った。対話を重ねる中で、個人的な記憶を他者と共有し、それをどのように作品として表現するかを探求した。</p>

	<p>こうしたプロセスを経て、身近なモノに内在する記憶や感情を視覚的・立体的に表現する作品制作へと発展させ、最終的に生徒による16点の作品が完成した。また、本ワークショップには顧問教諭である川村先生も参加し、生徒とともに作品制作を行ったことで、世代や立場を越えた創作と対話の場が生まれた。</p> <p>生徒たちは本ワークショップを通じて、制作の背景にある思考や対話の重要性を体験的に学び、アート活動を通じて自らの記憶や価値観を見つめ直す機会となった。</p> 
開催期間	2025年10月7日(火)、10月20日(月)、21日(火)、22日(水) 7日はオンライン、20~22日は部活動内(16~18時)
開催場所	津山高校 美術部教室
入場者等(参加者数)	21人(生徒16名+顧問川村先生+関係者)

### 事業内容(3)

事業名(個別にあれば記入)	アーティストトーク
参加アーティスト	高山夏希、森本信一(つやま自然のふしぎ館 / 森本慶三記念館・館長)、遠山健一郎(奈義町現代美術館・学芸員)
事業の内容 ※別紙でも可	<p>「古物と記憶」についての鼎談を行った。古物や残されたモノの価値、そして未来に繋いでいく意味について、森本館長や遠山学芸員との対話を展開した。本展や博物館の古物(美術館の作品)、残されたモノにまつわる物語、私たちの生活の中に息づく「残していくモノ」について深く掘り下げた。森本館長が持参された江戸時代の鉄瓶を会場の鑑賞者に回して見せながらトークを進める場面もあり、古物へ対するリアリティの解像度が増した。参加者からも活発な質問や意見があり、内容の濃いトークイベントとなった。</p>

	
開催期間	2025年12月21日 14:00～15:30
開催場所	PORT ART&DESIGN TSUYAMA
入場者等	50人

#### 事業内容（4）

事業名（個別にあれば記入）	公開制作
参加アーティスト	高山夏希
事業の内容 ※別紙でも可	<p>津山洋学資料館前の古民家を借り受け、その古民家でも作家が作品制作を行った。出雲街道沿いの窓越しから土間スペースでの制作現場が見られる「公開制作」とした。時間帯が不規則だったこと、女性一人での制作であったため公表は控えた。「古物」提供者や地元の方々と作家の交流拠点となった。この場所は津山城東地区の中心的観光スポットに位置するため、散策する観光客に本展の宣伝効果を高めた。</p>

開催期間	2025年11月24日～28日
開催場所	津山洋学資料館前の古民家 住所：津山市西新町70
入場者等	100人

### 事業内容（5）

事業名（個別にあれば記入）	クロージングコンサート
参加アーティスト	当真伊都子（Itoko Toma）、菊地慎（Shin Kikuchi）
事業の内容 ※別紙でも可	<p>アーティストトークの後に、ピアニスト/シンガーソングライターの当真伊都子（Itoko Toma）とプロデューサー/演奏者の菊地慎（Shin Kikuchi）によるデュオ「synfilms」のコンサートを開催し、美しいメロディのピアノ曲と透き通る歌声を会場に届けた。高山夏希氏が東京のアトリエで作品制作時に聴いていること、当真氏と菊地氏が当館にて2024年に展覧会およびコンサートを行った縁があり、今回の演奏会に繋がった。観客と一体となり展覧会フィナーレの余韻を音楽と共に味わった。演奏会は大型作品が展示されたレンガギャラリーで開催し、作品との一体感を醸成することが目指された。作品越しに演奏者が見え隠れし、メロディが会場を包み込むように聴こえる環境を整えた。会場の壁面に椅子を並べ、作品を囲むように鑑賞者は椅子に座り演奏を聴いた。</p> <p>高山夏希氏によるライブペインティングも行われた。音楽に合わせて、作品の一部にも使われた白亜の大理石に注射器で絵具を絞り出す独自技法で着彩していった。また当真氏が演奏する電子ピアノにも着彩する場面があり、その様子に、鑑賞者は息を呑み静</p>

かに見守った。さながら抒情的かつ美しい映画のワンシーンのような演奏会となった。



ライブペインティングを行う高山夏希氏(左)、音楽デュオ「synfilms」の当真伊都子氏(中央)と菊地慎氏(右)

開催期間	2025年12月21日 15:45～16:15
開催場所	PORT ART&DESIGN TSUYAMA
入場者等	50人

## 成果・効果

事業全体の 成果・効果	本事業の展覧会来場者516名（うち会期展示395名、関連事業参加者121名）であった。地域住民に加え、広く県外（東京・福岡等）からの来訪者もあった。文化芸術を目的とした来訪動機を創出することで、津山城東地区への回遊・滞在の促進に一定の効果をもたらしたと考える。
※以下の観点も盛り込む こと <観点>	
・地域の魅力向上や発信 ・地域活性化 ・他地域への展開の期待 ・県民に対する文化芸術 に触れる機会の提供	・地域の魅力向上や発信 地域住民から提供された家財や古物を用いた作品制作によって、津山圏域の暮らしや歴史、記憶といった目に見えにくい地域資源を可視化することができた。来場者にとっては、地域の過去と現

	<p>在をつなぐ新たな視点を提示する機会となり、津山ならではの文化的魅力の再発見につながった。</p> <p>また、津山高校ワークショップや展覧会について新聞社やテレビ局の取材があり、記事やテレビニュースとなり情報発信された。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>- 山陽新聞（2025年12月12日）</li> <li>- 津山朝日新聞（2025年10月22日、12月12日）</li> <li>- RSK山陽放送 イブニングニュース（2025年12月20日）</li> <li>- RNC西日本放送 news every.（2025年12月19日）</li> </ul> <p>・地域活性化</p> <p>本展をきっかけに、地域住民が会場を訪れ、自身や知人が提供したモノがアート作品として展示される様子を体験することで、会場と地域との心理的距離が縮まった。また、会期中には幅広い世代の来場が見られ、文化施設を核とした人の流れと交流が生まれた。</p> <p>津山高校美術部とのワークショップでは、美術活動を生業とするプロ作家の作品制作に対する想いや生き様を生徒に直接伝える有意義な機会となり、価値の高い生きた学びの機会となった。それは、生徒のワークショップへの感想に十分表れている。</p> <p>・他地域への展開の期待</p> <p>本事業で実践した「地域住民の生活史に根ざした素材収集」「歴史的建造物を活用した展示」「教育機関との連携による人材育成」は、地域特性に応じて他市町村でも応用可能なモデルである。特に、既存施設を活用したアーティスト・イン・レジデンス事業は、県内各地への展開が可能である。</p> <p>・県民に対する文化芸術に触れる機会の提供</p> <p>入館無料とすることで、日常的に美術館を訪れる機会の少ない県民も気軽に来場できる環境を整え、現代美術に触れる機会を広く提供することができた。</p>
<p>地域住民、文化芸術団体、教育・産業関係機関等と連携・協働した取組</p>	<p>本事業では、地域住民との協働を展示制作の中核に据え、作品素材の提供やヒアリングを通じて双方向の関係性を構築した。</p> <p>古物収集に掛けられる期間は短かったが、できる限り多くの地域住民（津山市・美作市・鏡野町・勝央町・奈義町など）の提供者と交流を図り、モノにまつわる話やエピソードを傾聴できたことは意義深かった。古物を収集するという初めての試みは、期待通りにモノが集まるのか当初懸念があったが、蓋を開けてみればその心配は杞憂に終わった。古物の提供がなければ達成し得なかつ</p>

た事業であるが、想像より遥かに多くの古物が集まったことは嬉しい驚きであった。ひとえに事業趣旨をご理解いただき、温かい支援の手を差し伸べてくださった地域住民の方々やご支援・ご協力いただいた皆様に心より感謝申し上げたい。この事業を通して、この土地の人々の惜しみない心のあたたかさを再認識できたことは当館にとっての成果の一つである。

作家にとっても縁が少ない岡山県北部地域・津山圏域の方々と直接顔を合わせ温かい交流や意見交換ができたことは、作家のこれからの創作活動において貴重な体験となるに違いない。そういう意味において、若手作家の育成にもつながる取り組みとなった。

また、地元教育機関である津山高校美術部と連携し、ワークショップを実施するなど、地域に根ざした文化芸術活動の推進が図れたことも大きな成果である。

加えて、古物回収及び交流事業に参加された方々の意見を記す。

- ・ 不要になったモノが素晴らしいアート作品になっていて驚いたと同時に大変嬉しい。
- ・ 楽しい取組。
- ・ 想像を超えたアート作品。
- ・ 地域のモノを活用して作品展示をしてくれた作家に感謝。

また、作家から地域に大型インスタレーション作品を留めておきたいという要望を受け実現した。展覧会終了後、津山市城東地区にある菅田株式会社「KANDA本店」（津山市川崎1902-3）併設の「カンダミュージアム」に寄贈し、作品の移設設置を行った。多数の津山ゆかりの作家(赤松麟作、日原晃、三宗智恵子、木村克朗等)の作品を展示している私設ミュージアム空間に呼応するよう、作家とともに作品を再構築した。常設展示となり、いつでも高山作品が鑑賞できる環境を実現した。





子どもや若者を対象とした文化芸術に触れる機会を提供するための取組  
(対話型鑑賞、ワークショップなど)

津山高校美術部の生徒を対象に、作家本人が講師となり、4日間にわたるワークショップを実施した。ワークショップでは、作品制作の背景や素材となるモノの記憶について対話を行いながら、実際の制作プロセスに触れる機会を設けた。これにより、生徒たちは完成された作品を鑑賞するだけでなく、現代美術が生まれる過程や、地域と芸術の関係性について主体的に考える経験を得ることができた。

#### 生徒のワークショップへの感想

- 初めてアートを生業している方と話をするだけでなく、その方の作品の詳細が知れたり、実際に体験させてもらうことができるとてもアバンダント（豊かな）な経験でした。（中略）将来的にこの経験を自慢して生きていきたいです。
- 思い出深いアイテムを作品にする、言い換えれば思い入れのあるアイテムを別のものに変えるということ。いくら使わなくなった or 使えなくなったものとはいえ、そんなものを自分の手で作り変えるのは未練が残る。まるで過去の思い出を手放すかのようで。だが、逆に考えれば過去を捨てて、未来の新たな作品に繋いだということ。いつまでも過去に囚われず、未来への一歩を踏み出せた。そんな経験だったのかもしれないと感じた。
- 今回のワークショップは非常に実りのある時間だったように思う。我が家の中で古物がどのように受け継がれてきたのかを知るとともにそれについての様々な解釈をグループワークの中で見つけることができた。今後年を重ねていくなかで、物を通して過去を回想することは多々あると思う。そんなとき、ここで得たそれが自分というものを形成するなかでどのような働きをしていたのかという視点は、きっと大切なものになると思う。

- 今までではもう使わないものとして部屋の奥底に眠っていた物たちですが、今回のワークショップをきっかけに掘り返してみると、「こんなのあったな」「懐かしい」「好きだったな」など、使っていた当時の記憶を思い起こすことができました。また、作品にする過程で、それらの大切な古物と改めて向き合うことができ、とても良い機会になりました。
- 今まで漠然と中学校は楽しかった、小学生の頃はある程度だったと思うことが多かったけど深くは考えることはありませんでした。今回のワークショップで自分が持ってきた古物から古物の記憶と私の思い出を絡めながら考える中で自分が小学生の頃どんなことを思って中学生になってどうなったか、今はどうだろうと自分のことを深く考えるきっかけになりました。また、そのことに関してグループワークでも語り合っただけで普段は話さないような内容まで話せてスッキリしました。自分のことやモノの記憶などをそのまま作品に落とし込むことがいままでできなかったのがなかったので今回その楽しさや難しさを知って私の中で美術の新しい扉が開かれた気がします。これから作品を作るときは自分と向き合う時間をもっととってみても面白そうだと思います。
- 今回のワークショップを通して、家の中に眠っている自分の古物にもう一度触れることができ、その古物に込められているたくさんの人の思いや誰かの過去を心から感じて、作品を作るという経験ができました。また、他の美術部員の作品を鑑賞したり、古物についてみんなと対話する中で共感できることを見つけられたり新しいアイデアをお互いに共有したりできる良い機会となりました。今後、積極的に自分の周りのものに触れたり、たくさんの人と交流したりして、自分の感性や表現を深めて追求したいと思います。
- 古物を通して忘れていた昔の思い出とかに触れて、今の自分と向き合えて楽しかった。友達と古物の話をお互いにしたとき、普段はあまりしない深い話ができたと、自分や相手の新しい一面に気づけて、対話の楽しさや大切さを実感した。
- この度は、古物を使った創作ワークショップを企画してくださり、ありがとうございました。最初は家にある古い物をどう扱えばいいのか分からず、ただのガラクタにしか見えていませんでした。しかし、グループでの対話を通じて、それぞれの物が持つ時間や記憶に気づくことができました。壊れているのに何十年も残ってきた理由を考えるうちに、古い物の見方が大きく変わりました。また活動を通して以前はただ懐かしいから好き

ただただの古い物が、今では家族の歴史を内包した存在として意識できるようになりました。創作を通じて、祖父が子供の頃から家にあった物たちと向き合う時間は、自分にとっても貴重なものになりました。このような機会を与えてくださったことに、心から感謝しています。本当にありがとうございました。

- 古物というテーマで実際に作品を作ってみて、古物は人とのつながりや思い出を通して誰かにメッセージを残す事ができるものだと思います。これからは捨てられないものと向き合って作品にしてみるなど自分なりに消化できるようにしたいです。また私は、高山さんがボンドと絵の具を混ぜてダイナミックに作品を制作するところを見てとても興味が湧きました。注射器で描く技法も新鮮で見ていて楽しかったし、やってみたいと思いました。そして私が作品を作るときに悩んでいると高山さんが優しく声をかけてくれて、作品作りのヒントをくださったことにもとても感謝しています。貴重な経験をさせてくださりありがとうございました。ワークショップの経験を活かしてこれからの人生をより鮮やかなものにしていけたらいいと思います。お忙しい中来てくださりありがとうございました。
- ボンドと絵の具を混ぜて絞る、どちらも身近にあるものだが組み合わせて使おうとは思わなかったのが衝撃的でワクワクしました。絵の具は筆で紙に塗るという気付かないうちにあった私の常識を大きく崩し、ものづくりの自由と斬新さを知ることができました。今回の経験を通してこれから悩んだときは新しい世界を知ることの面白さを思い出して、多くのことに挑戦していきたいです。
- 身近にあるものに対してどんな歴史を辿ってきたのだろう、いつどこでどんな天気にも生まれたのだろう、など普段は考えないことを考える様になり、この経験を通して身近にあるものへの愛着や興味が湧きました。また、絵の具をたくさん使った制作によって立体的な表現をしたので、今後の制作は表現の幅が広がりそうです。
- 今回のワークショップを通じて、思い出のあるものはものとしての意味もありますが、それ以上に家族との思い出や友達との思い出が詰まっているのだと気付かされました。将来的に、ものはものとしての意味だけでなくものとの思い出も大事にして行きたいと思う。

	<p>美術顧問の先生からの感想</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>- このたびは津山高校美術部に対し、ワークショップを行ってくださりありがとうございました！生徒は、高山さんの飾らず誰に対しても対等である生き様や、デモンストレーションで垣間見せた絵の具とボンドの大胆すぎる調合スタイルや、注射器を使った繊細で圧倒的な技術力と表現力に大きく心を打たれたようでした。現在の高校生が置かれた状況は「多様性」という言葉がクローズアップされるように、画一的なんだと思います。物事の二面性について考えたり悩んだりするよりも、Google 先生やチャッピー (ChatGPT) に聞いたほうが正確で間違いのない答えが出てきてしまいますので。もちろん我々教員も様々な方法で多様性や個性について語ることをしていますが、「何を語るか」より、「誰が語るか」が大きな意味を持つことがあります。今回、アーティスト高山夏希さんの口から語られた言葉の説得力はとても大きく、対話を通じてその考え方や哲学に触れたことの意味は大きかったです。まして自分たちの常識を外れた絵の具や注射器の使い方を目撃したわけですから、大きな事件でもありました。ワークショップ後の創作を見ていると、本人たちなりに色々と模索しながら、古物と、古物に関わる自己と、現前する表現物との対話を楽しんでいたように感じました。今回ワークショップと創作、すべてを通じて素晴らしい機会と経験を与えてくださいました、PORT ART&amp;DESIGN TSUYAMA の飯綱さま、アーティストの高山さま、すべての皆様に感謝申し上げます。ありがとうございました。</li> </ul>
<p>来場者の意見等</p>	<p>来場者からは、</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・身近なモノが作品として再生されている点が印象的だった</li> <li>・地域の歴史や人々の記憶を感じられる展示だった</li> <li>・建物と作品が一体となった空間構成が良かった</li> <li>・東京や福岡からこの展示のために訪れたが、その価値が充分にあった。想像以上に素晴らしかった。</li> </ul> <p>など、展示内容やコンセプトに対する肯定的な意見が多く寄せられた。</p>

## 課題・今後の方向性

課題・改善点	<p>展示解説については、作品の持つ物語性を重視し、過度な説明を控えた構成とした。一方で、初めて現代美術に触れる来場者にとっては、制作背景やプロセスを補足的に提示する余地もあると認識している。今後は、解説ツールの多層化（簡易解説・詳細解説の併用等）を検討したい。</p> <p>また、来館者数を増やす取組として、若年層や初来場者へのさらなるアプローチ方法については検討の余地がある。来館者の感想は総じて肯定的な意見が多く意義のある取組であったと感じているが、現代アート自体がまだ津山圏域では依然として深く浸透していない現状があり、このような展覧会や2027年に予定されている第2回「森の芸術祭」の開催により、現代アートの楽しさを県民により身近に感じてもらえる環境づくりが課題であると感じている。</p>
今後の方向性	<p>今後は、本事業で培った地域住民や教育機関との連携を継続・発展させ、文化芸術を通じた地域参加型の事業展開を目指したい。また、津山の歴史的資源や生活文化を活かした展示を継続的に発信することで、地域内外に向けた文化的価値の発信と、持続的にぎわい創出につなげていきたい。文化芸術を活用した地域づくりは、単なる集客策ではなく、住民の誇りや主体性を回復するプロセスであり、本展における当館のような文化施設が果たす役割において、地域住民と作家の交流を支える「場づくり」と「調整役」を担うことで、持続可能な地域再生にもつながる事業になるのではないかと考える。本事業の取組は、「文化芸術を通じた地域づくり」を掲げる岡山県の施策理念とも親和性が高く、今後も県・市町村・民間が連携した持続的な事業展開に寄与するものとする。</p>



レンガ壁面に直接タイトル字を貼り付けた。  
シンプルながら、空間との融合が印象づけられ効果的であった。





アーチ越しのインスタレーション作品風景。作品設置の角度は、建築との一体感を生み出すために作家によって慎重に検討された。



作家 高山夏希氏と  
作品風景

古物を組み合わせて  
新たな息吹を吹き込  
みアートとして再生  
させた。



大型インスタレーション作品のタイトルは無題。箱は家々の象徴であろうか。筆筒や黒電話、着物、工具などを組み合わせ、歴史的情緒あふれる城東地区の町並みや出雲街道沿いの家・街区をイメージさせる。





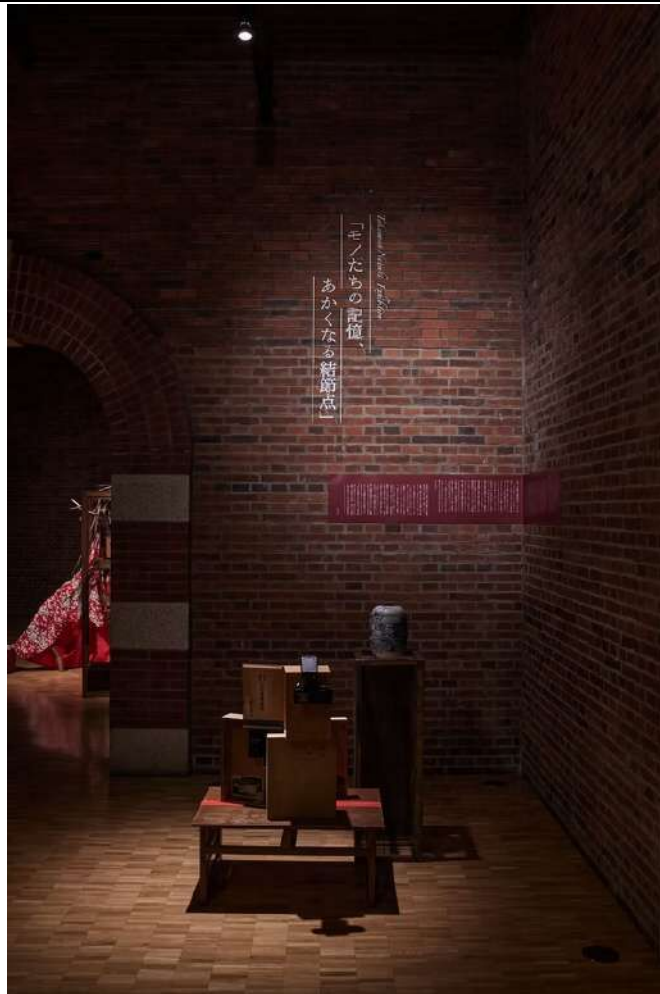
高山氏が直接ペインティングを施した桐箱。津山城東地区の区割り地図を参考に描かれた。

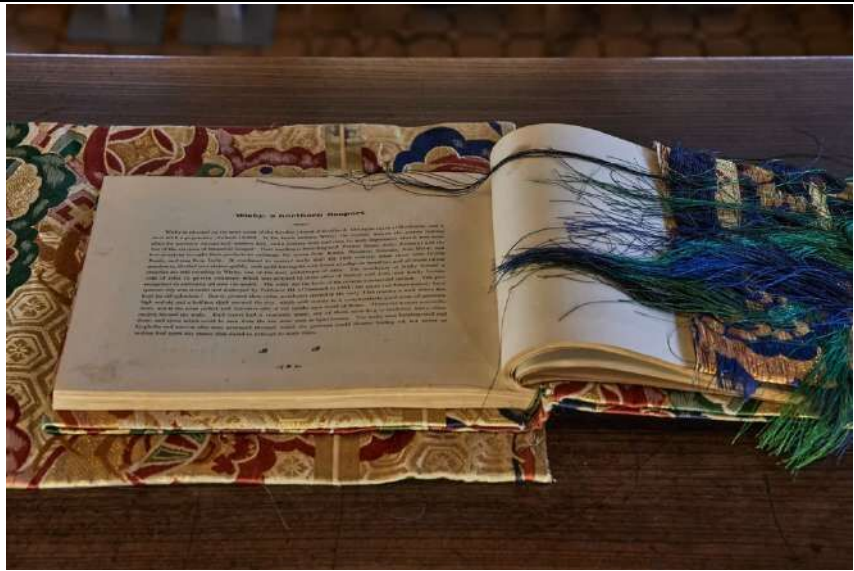


レトロな卓上スタンドの光線を思わせるアート作品。その光が照らすのはダムに沈んだ村の地積図である。



赤レンガ空間に映える作品とデザイン





津山にゆかりが深い鶴の紋様が刺繍された着物を用いたブックカバー。ほどいた糸の動きが印象に残る。



古民家倉庫の箆笥に眠っていたスクラップブック。アポロ11号の月面着陸など宇宙関連の記事が丁寧に切り貼りされてスクラップされている。そのままの状態で展示された。





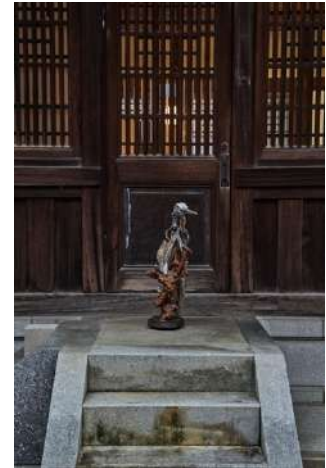
金庫には外国硬貨、金庫ケースなどお金に関連した古物を収蔵・展示した。瓢箪の舟がガラスの海原を航海するイメージ。世界の広がりを表した。



金庫等の入口上部。欄間に着彩した作品を展示した。



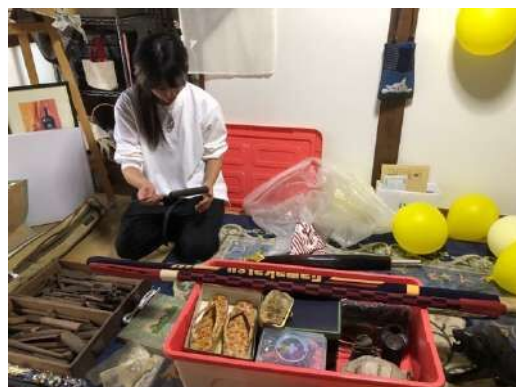
寄贈者の父の代から家に飾られていた木製の置物。流木と組み合わせ鳥のような生き物を制作した。緑色の腫がまるで生きているかのように。会期中は屋外に展示した。



「ポート アート&デザイン津山」外観  
岡山県指定重要文化財「旧妹尾銀行林田支店」  
の建築を活用している。大正9（1920）年竣工。

古物収集・地域交流を実施  
写真家 小林正秀氏も帯同された。

城東地区にある桶職人の町屋に暮らす古物提供者に話を伺い、エピソードをヒアリングした後、古物を引き受けた。祖父が桶作りに使用していた鉋や鋸などの古道具、釣り道具、置物、提供者自身の赤い浴衣など多数の品を提供いただいた。桶作りの工具や赤い浴衣など作品に使用された。





地域交流施設（じば子のおうち）にも伺った。この場所は多世代の地域住民や大学生が交流する拠点。



古物提供者からモノにまつわるエピソードをヒアリング。物語を聴きながら作品の構想を練る。



シダレザクラで有名な千光寺の早川住職より津山の歴史を伺うことができた。



元銭湯「福寿湯」：地域ゆかりの古い場所をカフェとして継承する



奥津温泉街（鏡野町）  
奥津荘にて古物収集  
奥津荘は、津山藩主とも縁が  
深い温泉宿である。

<奥津荘 HP より抜粋>  
江戸時代、津山藩の初代藩主  
である森忠政は、この湯を気  
に入り、湯治場として利用す  
るため、鍵をかけ、村人や部外  
者が利用できないようにした  
ことから「鍵湯（かぎゆ）」と  
呼ばれるようになりました。  
鍵湯は、趣はそのままに現在  
では奥津荘の浴場として使用  
されています。



蔵の中



古民家倉庫に残された古物たち



奥津溪の景色

津山市内（商店街）、出雲街道沿いの商家で古物を探した。



津山城東地区、出雲街道筋の築 150 年の歴史を誇る邸宅（現・うきぐさ屋）。以前は釣具屋を営んでいたという古民家。



ポート アート&デザイン津山にて古物収集を行った。

地域の方々が、当館に古物を持参し、寄贈してくださった。作家と提供者と古物を介しての会話が弾んだ。





着物、ランプ、硯、ウェディングドレスなど様々な古物が、想像を超えて多く集まった。

津山城東地区  
家具製作「にいの屋」にて



津山洋学資料館にて、津山の  
洋学の歴史及び洋学資料館  
の変遷などを小島徹館長よ  
り説明を伺った。





旧妹尾銀行林田支店が津山洋学資料館だった当時の貴重な写真を閲覧。中庭で西中学校の生徒が理科の実験を行う様子も残っていた。



つやま自然のふしぎ館（津山科学教育博物館）の森本信一館長に森本慶三記念館の施設案内をしていただいた。

旧津山基督教図書館の建物内には、代々森本家が営んできた江戸期の豪商「錦屋」関連の歴史民俗資料や津山藩の資料が多数保管されている。



津山高校美術部生徒とのワークショップ

会場：津山高校美術部教室

高山氏は生徒と積極的にコミュニケーションをはかり、生徒の創造力や自主性を引き出した。アドバイスも行った。

技法デモンストレーション

高山氏の独自技法である注射器にアクリル絵具を充填し、絞り出しながら点描表現を行うデモンストレーションを行うと、生徒から感嘆する声が漏れた。新鮮な技法を生徒も試した。

生徒各自が古物を持ち寄り、エピソードを班の仲間と共有し話し合う。高山氏とも気さくに話す生徒たち。



和気あいあいとした雰囲気の中進められたワークショップ。3日間連続、部活動の時間である午後4時から6時まで集中講義を行った。



